第九回 東北お遍路写真コンテスト

最優秀賞

村上　淳（宮城県気仙沼市）
『初日の出に願う』

今日は元旦、初日の出を見に気仙沼岩井崎にやってきました。龍の松の向こうの海から登ってくる日の出に今年一年が穏やかな災害の少ない年になりますようにとお願いをしてきました。
（撮影・宮城県気仙沼市／令和6年1月1日）

優秀賞

山下　春樹（岩手県軽米町）
『風を呼ぶ虎舞い』

虎が吠えれば風が吹くというように、海からの強い風が大漁旗に吹き付けていました。三陸の人々の心意気が感じられる虎舞いは、地域の個性が豊かで、そこで生きてきた人々の歴史を詰め込んでいるようにも見えました。
（撮影・岩手県釜石市／令和6年4月28日）

小檜山　裕行（宮城県角田市）
『春の一夜』

北上川のヨシ原に横たわる天の川、あの日もこんな夜だったに違いない。光が全くない満天の星空、後日人々は口々にきれいな星空が見えていたと。しかしほとんどの人はそんな余裕もなかったのでは、私もそのひとり。
（撮影・宮城県石巻市／令和6年4月6日）

佳作

西山　栄（福島県いわき市）
『ダム湖の前で』

東京電力福島第1原発のある大熊町の坂下ダム。この地域で活動していた「じじい部隊」も一定の役目を終えたと昨年解散し、「坂下ダム」そばにあった事務所も閉鎖していました。これからの復興を願うばかりです。
（撮影：福島県大熊町／令和6年9月21日）

佐々木　均（宮城県多賀城市）
『御座船出航』

塩釜港まつり。マリンゲートより島々を巡行する御座船を見送る風景です。多くの方々が打ち上げ花火と共に手を振り見送っていました。
（撮影：宮城県塩釜市／令和6年7月15日）

小曾根　蒼（埼玉県和光市）
『青空の裾』

高2の夏、一人でカメラ片手に夜行バスで訪れた仙台。真新しいアスファルト、建物に遮られない視界。震災遺構の荒浜小学校だけがぽつんとある。それだけ、それだけなのに、あんなにも心に感情が押し寄せたのは初めてのことだった。
（撮影：宮城県仙台市／令和6年7月23日））

鴫原　さとこ（宮城県亘理町）
『亘理のおばあちゃんの手仕事講座 紫蘇巻き作り』

NPO虹色たんぽぽのみんなのお家では亘理のおばあちゃんの手仕事講座「紫蘇巻き作り」が開催されました。材料の味噌はおばあちゃんの手作り。あーでもない、こーでもないと昔話に花が咲き楽しく教えてもらいます。
（撮影：宮城県亘理町／令和6年8月19日）

吉田　真一（宮城県多賀城市）
『未来へ架かる橋』

女川の離島出島（いずしま）に令和6年12月に出島架橋が開通します。島民にとって念願の橋が架かるということで、ボランティアの有志と海岸清掃など行っています。活動後に撮った浜にさす光が未来へ通じる橋のようです。
（撮影：宮城県女川町／令和6年1月20日）

守屋　正安（宮城県仙台市）
『懐しい情景、思い出を振り返る』

長い年月をかけて作られた貞山運河。ヨシ原が広がり両岸はきれいな松林だった。園児たちと保護者のハゼ釣り光景に足を止めた。幼き頃親に連れられ、それから子どもを連れて、時々ハゼ釣りに来たのを懐かしく思い出した。
（撮影：宮城県仙台市／令和6年10月2日）

門林　泰志郎（福島県いわき市）
『時を超えた13年の新社殿苕野（くさの）神社』

13年の時を超えて、新社殿苕野神社。浪江町請戸の町民にとって念願の新社殿で執り行われた御田植奉納です。復興応援を写真を通して全国に送ります。
（撮影：福島県浪江町／令和6年2月18日）

八木　充幸（宮城県仙台市）
『深沼海水浴場再開に向けたビーチクリーン活動』

仙台市内唯一の海水浴場で長く親しまれた深沼。大震災の津波により遊泳禁止に。今年7月15日からようやく再開となり、仙台のSNSインフルエンサーが清掃を呼掛け、3度目には若い人を中心に約70名まで広がりを見せた。
（撮影：宮城県仙台市／令和6年7月6日）

高橋　達也（宮城県東松島市）
『黄金の海』

気嵐立つ冬の朝。黄金色に輝く美しい海に浸り、ひとり至福の時を過ごす釣り人。震災から13年、少しづつ日常を取り戻し、自然の恵みや美しさに感謝する日々が戻ってきました。
（撮影：宮城県東松島市／令和5年11月22日）

岸　浩子（岩手県陸前高田市）
『何が見えますか？』

僕が生まれた時の町を僕は知りません。震災前の町はどんなでしたか？ 前に戻りましたか？震災前の人々の顔は見えますか？ 皆元気になりましたか？ 震災を知らない子どもが権現様に、まるで問いかけているようでした。
（撮影：岩手県陸前高田市／令和6年10月5日）

〈 第10回東北お遍路写真コンテスト作品募集！ 〉

■**募集テーマ**：風景・人物・祭りなど、東北お遍路に因む写真
■**応募方法**：写真は2Lサイズのプリントで、コメント（100字以内）と一緒にお送りください。写真とコメントで審査します。合成写真はお控えください。
■**応募期間**：2025年11月30日（消印有効）
▶**作品の送り先**：〒976-0022 福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3　東北お遍路写真コンテスト係

❖ 青柳　健二〔写真家〕

応募写真を見る前にコメントを読むという審査方法はここ3年ほど続いているが、今回もコメントから写真をイメージさせる作品が上位になったと思う。そして今回は新人さんの応募も多く、コンテストの広がりを期待させるものにもなった。最優秀賞を受賞した「初日の出に願う」は、気仙沼岩井崎の龍の松。龍の形に見える真横方向からの撮影が多いが、これはもっと下から見上げるようなアングルが大胆で、初日の出を拝む人たちの上にかぶさるような龍のシルエットが、人々を見守っているように見えてくる。優秀賞の「風を呼ぶ虎舞い」は、ちょうど飛び上がった瞬間を撮っていてシャッターチャンスを逃さない目は素晴らしい。「春の一夜」は震災当夜のイメージがコメントとマッチしていると思う。

❖ 渡辺　祥子〔フリーアナウンサー、情報誌「りらく」編集長〕

あの日から14年の月日が流れる。その一日一日を一枚の写真の奥に見るような、そんな写真と文に触れることができた。その中で強く感じたのは、「つながりの力」。過去から今につながる地域の絆を実感させる写真、何度もこの被災の地に足を運ばなければ決して撮れないような写真、さらにはこれからのつながりを予感させるような写真など、全ての写真に撮影者の温かい思いがにじみ出ていた。そうした一枚一枚の写真に込められた思いは、今を生きる人々の悲しみを包み込み、未来へつなげる力を持つ。このコンテストの持つ意味は、過去を振り返り決して失くしてはならない大切なものをつないでいくとともに、新たな創造をもたらすものでもあると確認できた審査のひと時だった。